

# プチプチカ プチプチ文化研究所

東京都千代田区

## プチプチは文化だ！

誰もが一度は目にしたことがあるであろう、空気の入った緩衝材「プチプチ」。この「プチプチ」を日本で初めて独自の製法で開発した川上産業にはなんと「プチプチ文化研究所」なる研究機関があるという。



「プチプチ」の一般名称は「気泡緩衝材」。日本における先駆者は川上産業で、1967年（昭和42）に独自の製造法によって完成させ、「エア・バッグ」という商品名で発売を開始した。

1994年（平成6）には「プチプチ」という呼称を商標登録している。

空気を含んだ凸凹があるポリエチレンのシート。しかし、同社はこの商品に壊れ物を梱包す

る以外の用途があることに気付く。2001年には社内にプチプチ文化研究所を設立し、その可能性を探ってきた。

所長の杉山彩香さんは言う。「一番の役割はモノを衝撃から



1 ハート型の「ラッキープチ」は1万個に1個の割合で現れる。2「プチプチ」のすべてが詰まったオフィシャルブックとクラフト実例集。3「浮世絵ぶちぶち」には一升瓶サイズと四合瓶サイズがある。



4 ハウス栽培のための保温内張り材「エコボカプチ®」。太陽光を通す上、保温性にも優れている。5 高崎工場の敷地内にある自動販売機。幅600mm×42m巻のプチプチロールが500円で購入できる。6「浮世絵ぶちぶち」のデザインを手がけた coneru の皆さんと記念写真（一番右が杉山さん）。

守ることで、実は私たちの知らないところで面白い使われ方をされていることに気付いたんです。まずは、そうした事例を集めることから始めました」

その結果、使用後も捨てずに取っておく人が多いことがわかった。断熱材として窓に貼ったり、「プチプチ」を使ったアート作品まで登場していた。さらに、ストレス解消のためにつぶすという意外な活用も。

「それを知って開発したが、潰す時に気持ちいい音が出る『プチンスカット®』。モチモチの触感と潰したときの高音質にこだわっています」

話題になったのはシートの裏に浮世絵を刷り込んだ「浮世絵ぶちぶち」。江戸時代に刷り損じの浮世絵が緩衝材として使われていたことを知り、開発された商品だ。日本酒やワインなど、贈答品のラッピング材とし

て人気となり、2018年度のグッドデザイン賞を受賞した（デザイン coneru）。2014年に名古屋営業所の脇にツリで設置したのは「プチプチ自販機」。2016年には高崎工場の敷地内にも設置した。杉山さんは「意外と売れています。今後は全国にもっと増やしていきたい」と言う。

技術的な面では2004年に凸部の形状を円柱から台形に変更。これによって緩衝能力を保ったまま、20%の省資源化に成功した。さらに、牛乳瓶のポリエチレン製のフタやマヨネーズの容器の製造過程で出る廃棄ポリエチレンなどの再利用も推進。現在は7〜8割の「プチプチ」が再生原料を使用している。「ダンボールやペットボトルは社会的なインフラとしてリサイクルの仕組みが確立されています。『プチプチ』も同じような環

境作りを目指したいですね」他にも、トンネルなどの工事現場でコンクリートの養生をする際に「プチプチ」を貼ると、丈夫で割れにくい壁ができることが判明。土木関連業界では3年ぐらい前から「プチプチ」の需要が伸びているという。

「また、2007年に発売した『プチプチ寝袋』は東日本震災を受けて再び注目を集めています。掛け布団と敷布団のセットで保温性にも優れているんです。当社では大きな災害が起きると各自自治体に問い合わせ、了承をいただければ大量に寄付をさせていただきます」

1990年には約50億円だった売り上げは現在、約140億円に増加した。包装以外にも無限の可能性を秘めている「プチプチ」。実用性と遊び心の両面から、その進化はまだまた続きそうだ。（石原たまき）